

蜃 氣 樓

生 島 遼 一 著

岩 波 書 店

蜃 氣 樓

一九七六年一〇月二六日 第一刷発行 ©

定価一六〇〇円

著 者 生 島 遼 一いづみ しま りょう いち

発行者 岩 波 雄 二 郎

発行所 〒100 東京都千代田区一ツ橋二五十五
株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三六五十四二二
振替 東京六三三三〇

印刷・三陽社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

I

現代と言葉 三

文体(スチル)ということ 九

ジャンヌ・ダルクの機智 四

——フランス文学と諷刺——

「言葉」の芝居 六

——マリヴオーとモリエールの喜劇——

II

能の美しさ 七

世阿弥の「花」 八

利休と世阿弥 四

舞と面 一〇

愛と西洋	一五
京大「仏文科」の初期	一六

IV

フェノロサの『東亜美術史綱』	一七
鏡花のこと	一八
『藪柑子集』と『城のある町にて』	一五
黒い雨	一九
大阪の船場	一九
——宮本又次著『船場——風土記大阪』書評——	

V

奈良の仏たち	二〇
唐招提寺の千手観音	二五
展覧会の印象	二七

(1)	ドラクロワ展を見て	二二七
(2)	十九世紀名画展	三三一
(3)	モネとセザンヌ	三三五
	アール・ヌーヴォーと現代	三三〇
	浮世絵と私	三三五

VI

	ブルーストの思い出	二五三
	グレコの肖像画	二六一
	——ブルーストとユダヤ人——	
	ゾラと世紀末芸術	二七八
	回想の読書	二八五
	——ユイスマンスのこと——	
	サラムボーとサロメ	二九四
	——三人の作家——	

小説と「人称」の問題	三〇四
「小説の小説」形式について	三〇九
——文学のパロック芸術化——	
VII	
フランス文学と私	三三五
——外国文学研究の基本的態度——	
あとがき	三六五
発表紙誌名一覧	三六九

I

現代と言葉

去年の正月のある新聞に書いた短文で「簡潔の美德」ということを説いた。今年も同じことになりそうである。⁽¹⁾

おしゃべり好きなフランス人、言葉づかいの上手なフランス文学と長年つきあってきたせいで、私は日本人は無口でしゃべり下手だと思っていた。最近、日本人もずいぶんおしゃべりになったらしい。テレビに出演する主婦たちがいかにみんな口達者で、話しかたも堂々としているか。

しかし、いくら威勢よくしゃべっても、どこか日本語そのもののもつ欠陥や弱みを、その多弁のうちにかえって感じさせられることもよくある。近ごろの司会者や落語家のようにしゃべるのが稼業の人たちも、八方破れといったかたちでしゃべりまくっている。古風な「型」でしゃべる人は少なくなったが、かえってこういう「型」をもっている人のおしゃべりのほうに日本語らしい自由さを感じることもある。若い落語家の八方破れ型のおしゃべりはかえって聴き手を意識

し、露骨におもねっているようなやみがある。

口でのおしゃべりだけでなく、書き言葉にも現代風の崩れの傾向がはっきり出ている。むかしは簡潔とか明瞭といったことが美德のようにいわれていた。今はそういう気づかいをもって書いている人はごく稀になった。言っていることが正確であろうが不正確であろうが、なるたけたくさんしゃべろう、そしておしつけようという意欲のようなものが、近ごろのおしゃべり、書きものにつよい。そういう漫才型、多弁型文章でかかれた本を何冊か読みおわると、ドイツの哲学者ハイデッガーが指摘したおしゃべり「空語・空談」(Geröde)の世界ということを思つて、むなし気持ちになる。ハイデッガーはわれわれ人間が第一義的なことを忘れて、あるいは忘れるために、そらぞらしい言葉——空語・空談を並べて生きている現実の一面を鋭く見ぬいた人だ(『存在と時間』第五章)。そらぞらしいおしゃべりも愛嬌があるが、一方で人類の死滅といったことを論議しているとき、かえって寒気がする。

私がフランス文学をやるようになった一つの動機は、言葉が明晰で、はっきりしていて、美しいということだった。しかしそのフランス文学も、最近はかならずしも明晰でわかりやすい言葉や文章で書かれていない。「明晰ならざるものはフランス語にあらず」という有名な原則は多分十九世紀末ごろで死滅したと見ていいだろう。それでもさすがに規格、背骨のしっかりしたフラ

ンス語は、老化しても日本語のような崩れやすい自由さをもっていないから、一応「文学」の私たちを保存している。

現代は何もかも崩れて行くという印象を私たちはもっている。変化し崩れて行く。社会のかたちが変わり、価値観が変わり、言葉もそれと並行して崩れて行く。新刊書のいっぱい立ちならんだ本屋の店先は、こういう崩壊感覚でみちている。充実した言葉の美しさ、きりっとした美しさを感じさせるような文学はもう夢物語にしかすぎないのだろう。私は学生時代に、落合太郎さんという旧師から言葉を大切にするようにときびしく戒められた一人だ。ものを書くときに意味の不明瞭なことを書いてはいけない、あいまいな表現は使わぬようにときびしくつけられた。落合さんは少年時代漢学の教養でそだった人だが、後にひろく西洋の古典を読んで独特の語法や文体を身につけた不思議な文章家だ。明晰で、聞き手読み手に親切な言葉、しかも鋭い思想をかく包んだ美しい言葉をもって語り、書かれた。万事において師に忠実であった私ではないが、この言葉の教育だけはどうかやら生涯まもりつづけたと思っている。

昨秋、三十年前に出した『日本の小説』という旧作を再刊した。その文章を今見ると堅苦しい感じがして、もう少し平易な現代風文章に直したかったがなかなかうまくいかなかった。私も年

をとってだんだん無精むしやうになり、自由といえは聞こえがいいが、気らくで無責任な書きかたをするようになったらしい。日本語は気らくに書こうとすればきりがいい。座談会などという特殊な発表形式が日本でさかんに利用されるのも、言葉の自由さ、悪くいえば無責任な放らつさが原因しているのだろう。友達同士気らくにしゃべるにはこんな都合のいい自由自在な、そしてさまざまの感情のニュアンスをふくんだ言葉はよそにないだろう。残念なことには、何か責任をもってしめくくりをしようとするときに、あいまいにすんでしまふ欠陥のある言葉だ。私の知人のフランス人は、日本語は海月くらげのようだと評した。国会の質問などでそれがよくわかる。野党議員がきびしい質問をすると、政府側の応答者の言葉づかいが急にていねいになり、あいそよくなって問題はうまく逃げてしまふ、そういう例をテレビでよく見た。フランス語やドイツ語ではああいうふうになるまいな、といつも思う。

本を出すときには、読者におもねらず、そしてわかりいい簡潔な言葉で書いてほしい。このごろの文章はだらだらとしすぎる。サルトルの哲学論文や政治評論を読んで、よくまああんなにくどく書くな、と私はいつも驚いたものだ。しかし、西洋には問題を追いつめ追いつめ執拗に推して行く特殊な思考法があり、サルトルの文章もそれにちがいないが、あれだって私はもう少し簡

潔に書けそんな気がしてならない。あの流儀を日本語でやられたら支離滅裂になるだろう。

私は自分のうちに矛盾を感じることがよくある。外国文学ではだんだん深入りしてむつかしいものを読むようになり、ドストエフスキー、ブルースト、カフカ、ナタリー・サロートなど、けっして簡潔明晰でない作品に親しんできた。こういう文学の書かれた言葉への信頼があるのか。はじめはフランス文学を読むことはただただ明晰な文章を読むことが楽しかっただけに。半面、自国の文学で私が好きなものといえば、国木田独步、志賀直哉、梶井基次郎と、簡潔で充実感のある文体ばかりである。矛盾しているが、正直に言えばそうなので、しかたがない。長年こういう二重生活をつづけている。

日本語を問題にするにはもつと言語学者のやるような勉強をしなければだめだが、私は怠けている。一昨年、私の友人の吉村正一郎が随筆集を出したら書評で「達意」の文章とほめてあり、数カ月後に私の出した本の書評にもやはり「達意」という評語があつて、二人して笑つた。文章とは意を達するのが目的だから、当然のことで、達意でない文章を書かれてはたまらない。

詩人ポール・ヴァレリーの言葉で、いつも私の頭にうかぶ一節がある。ご承知のようにフランス十七世紀にはえらい作家がたくさんいて、それぞれすぐれた文章を書いた。いわゆる古典作家である。ヴァレリーは、これらフランス文学を代表する十七世紀の大家達は「読者に遠慮をし

ない人達」と評した。⁽²⁾「読者の骨折りも、自分の骨折りも斟酌^{しんしゃく}しない」。つまり、自分の言いたいことだけをむだなく遠慮なく明瞭に書く。「今少し時がたてば、我々はこの人達をもう理解しなくなるだろう」。私は最近明治大正ごろの作家達のすっきりした文章を読みつつ、このヴァレリの鋭い一句を思い出した。

(1) この小文は昭和五十年一月三日の『朝日新聞』に掲載された。その前年の年始めに『日本読書新聞』に「簡潔の美德」を説くもつと短い文章を書いている。

(2) このヴァレリーの言葉は「フルースト頌」(Hommage à Marcel Proust)という文章の最終部分にある(筑摩書房版『ヴァレリー全集』7)。

(昭和五〇年)

文体(スチル)ということ

文体という言葉は漢字として古いのか新しいのか私は知らない。国語、国文学の方では、文章の姿とか容態というくらしいの意味であろうと思っている。文章体、国語体、和文体、和漢混交体などといった分け方をする際にも文体というようだ。つまり、文体というかわりに文章といっても大差ないのであろう。私がこれから少し考えようとしている文体の意味は、ただ文章の外形の姿ということとは少し違って、もう少し深い意味なのである。われわれ多少とも西洋文学に親しんだものが文学上の用語として文体といった時には、通常、*style*とか*style*という歐洲語を背後に考えているものである。文体という文字をこの頃は国文学者の書く論文などにもよく見るが、これは文章というより用語の新しさから用いられているので大差ない場合が多いようである。われわれが近代文学について用いる場合は、文章という用語ではしっくりあてはまらないスチルという歐洲語にそれをふりあてて使うのだと思う。スチルというのは、これもあまり古い言葉ではないのだが、含蓄のあるいい言葉である。そのわけは、これはただ文学に関して用いるだけでない